１　要　旨　把　握

要旨とは、筆者が何についてどう認識し、語っているかということです。

⑴　要旨把握の問題はどうやって作っているか

出題者は筆者が主張したい文章のブロックを抜き出してきます。それも、筆者が説明したい主旨について例をだしてきたり、筆者の主張と全く逆の論理を説明して最後に否定するなど、文章の構造に特徴があるところが出題されます。

⑵　選択肢は問題文の語句を必ず使用するか

要旨を把握できるかどうかを評価する試験ですから、その文章の要旨がはっきりと書いてあるところは問題文として選びません。つまり、ストレートに要旨を表現しているものはないと考えて問題を解くことです。受験生は文章の構造に気をつけて要旨が表されている部分を見つけなくてはなりません。また、筆者が主張したいことを選択肢ではそのまま引用せず、別の言葉で置き換えている場合が多くみうけられます。こうした作問上の技術から考えると、文章中のある言葉が一人歩きしたかたちで強調されていたり、本文のままの言葉が選択肢にでてくる場合は正答ではないと考えられます。

⑶　具体的解法のポイント

①　多用されている主語に注目する。

⇒主語は要旨を決定するので、数多く出てくる主語にそって筆者の見解を整理していくことが必要。

②　前提や前段落を受けた文章に着目する。

⇒筆者の見解は必ず進展・展開する。その際、前提となっているものは根拠になりうる。したがって、前提を受けている文章は要旨に近い。

③　文章的結論と論理構造的結論を混同しないように注意する。

⇒要旨とは何をどう認識しているかであり、結論が何かではない。

④　択一式の問題に出てくる誤りの要旨は次のようなもの。

・一面的
・断片的
・偏重

※　一部を強調するものは誤りのケースが多い。

・表層的　（うわべの理解）
・意図的見解（内容とずれた主張）
・錯誤（勘違い）

⑤　強調度の高い文をまず排除する。

⑥　最も無難で平均的・網羅的な選択肢が正答に近い。

【問題編】

〔№　1〕次の文章の主旨として最も妥当なものはどれか。

花は一途に見るものではない。見ることを目的として見ると花は台無しになってしまう。花は言うなら気付くものだ。ああ花が咲いているなと気付いたとき、その花はその人の心の中に植え替えられて心の中でふくいくたる香りを放つ。花はそこに、あるいはかしこにあるものであり、それをなに気なく心にうつしかえるとき、花は最高の美をも発揮するのである。

1　花はそこに、あるいはかしこになに気なく咲いているのが最も美しい。

2　花の美しさに気付くことができるように、心を美しく磨かねばならない。

3　花は、咲いているなと気付いて心にとらえた時、最も美しくみえる。

4　花が最高の美を発揮するのはふくいくたる香りを放つ一瞬である。

5　花は見るべきものではなく、自然に咲くままにまかせておくべきである。

〔№　2〕次の文章の要旨として最も妥当なものはどれか。

青春時代とは第二の誕生日である。自我の覚醒する日でもあるが、そのとき「われ」を誕生せしむる機縁がすなわち邂逅である。書物でもいい、師匠でも友人でも恋人でもいい。誰に出会ったかということが重大だ。そして邂逅によって結ばれた友情に私は人生の人生たる証を見ようと思うのである。むろん友情とは単なる遊び仲間の交情という意味ではなく、悩める魂と魂との格闘による結合をいう。書物との関係も私はこの関係において見る。

1　書物との出会いも含めて、悩める魂相互の格闘の結果生まれる結合が青春時代における自我覚醒の機縁となる。

2　青春時代に自我が誕生した後、どのような邂逅を経験するかにより、その後の人生が意味のあるものとなるかどうかが決まる。

3　価値ある書物との邂逅は、青春時代に巡り会うどのような師匠、恋人にも勝るものである。

4　魂と魂の格闘がなければ、友情は単なる遊び仲間の交情で終わってしまう。

5　青春時代における自我の誕生は困難で、各人はそのために多くの人々と格闘しなければならない。

〔No.　3〕次の文章の筆者の心境として、最も妥当なものはどれか。

私が書くテレビドラマや映画のシナリオは孤独がモチーフになったり、その束の間の克服がテーマやさわりになったりする。するとここへテレビのプロデューサーが現れ、「そういうふうに孤独にこだわるのは古いんじやないかねぇ、もう。いまはね、もう孤独は正面から向き合ったり、克服したりするものではないのだよ。孤独はただ、まぎらすものなのだよ。大げさに取り上げると、見ているほうは大人気ないような気がするんだよ。」などと言う。あ、ねぇそうかもしれないねぇ、と私は意気消沈する。もっと現在に適応しなくちゃ、と思う。なにしろ、「現代」に適応しているくらいではおっつかないのである。ひたすら「現在なのだ」。それも克服しようとしたり、行先を見付けようなどと考えてはいけないのである。そんなことにこだわり出すと、売れなくなってくるのである。

1　プロデューサーの軽薄さに腹を立てており、孤独を昔からの重いテーマとして真剣に取り組みたいと思っている。

2　自分自身が深い孤独の中に落ち込んでいるので、そこから脱出したいと願っている。

3　視聴者に孤独感がないのがわかって、孤独をテーマにしてきたのは問違いだったと後悔している。

4　孤独にもう少しまともに向き合ってもよいのではないかと考えているが、現実とのギャップに悩んでいる。

5　視聴者の変化についていく自信があるので、売れるテーマを探して「現在」に適応するのは簡単なことだと思っている。

〔No.　4〕次の文の要旨として最も妥当なものはどれか。

ユーモアはしばしばどうでもよいもの、あってもよいがなくてもべつに困らないもののように考えられているが、私はユーモアが人間らしい生活に欠かせない本質的な要素であると思う。人間は笑うことのできる唯一の動物だといわれる。笑いは人間だけに与えられた貴重な能力なのである。日常生活にユーモアがないと、無用の緊張や誤解が生まれ、人間関係がぎすぎすしたものになる。ユーモアと笑いはストレスや怒りを和らげ、人間関係を円滑にする。誰でも笑いながら同時に腹をたてることは不可能だろう。ユーモアの原点は相手のために温かい雰囲気をつくりたいと思う願い、思いやりの心である。この点でユーモアはジョークやウィットと異なる。ジョークやウィットは知識であり、テクニックであるがユーモアは生きた心の態度なのだ。

1　笑いがないと、ぎすぎすした人間関係を円滑にすることができない。

2　人間が心から笑うことができるのは、ジョークやウィットでなくユーモアである。

3　人間関係に緊張や誤解が生まれるのは、ユーモアよりもジョークやウィットを多用するからだ。

4　日常生活でストレスや怒りを感じないようにするには、ユーモアを身につける必要がある。

5　ユーモアは相手に対する温かな気持ちの現われであり、人間らしい生活に欠かせないものである。

〔No.　5〕次の文の主旨として最も妥当なものはどれか。

日本の詩歌には四季折々の植物の名はふんだんに出てくる。それらの花や草は、もちろん色をそなえている。同じ葉が緑から秋の紅葉や黄葉へと鮮やかに変わって詩情をかきたてることもある。したがって、日本の詩歌には、植物を中心とする四季の色が満ち溢れていることになる。一応はそう考えられる。だが、はたしてそれらの詩歌の作者たちが、たとえば紅梅とか桜、藤とか花橘、杜若とか楝、撫子とか萩、桔梗、紫苑、女郎花、あるいは竜胆、菊、紅葉などという語を作品の中で用いているとき、それらの花や葉の色を専念描写しようとしていたかといえば、そういう例はむしろきわめて稀である。彼らは、そういう花や草や葉によそえて、自らの喜びや悲しみの情をのべることのほうにもっぱら心を傾けていた。その意味では、花や草や葉は、必要不可欠な道具だてではあっても、詩歌

の主役ではない。人間の「思ひ」という無色なもの、その働きそのものに、彼らの関心は集中していたからである。

1　日本の詩歌の作者たちは、植物の色に自然界の刻々の変化を感じ、詩情をかきたてられた。

2　日本の詩歌には、植物の名がふんだんに出てくるが、その作者たちの関心は、その植物のそなえる色にあった。

3　日本の詩歌では、自らの喜びや悲しみの情をのべることに心が傾けられたため、自然界の色は無視されている。

4　日本の詩歌に現われる色は、草花の色そのものとしてではなく、心の傾きの象徴として出てくる。

5　日本の詩歌の主役は、人間の「思ひ」であり、自然界の色ではなく無色でこれを表わした。

〔No.　6〕次の文章の要旨として最も妥当なものはどれか。

よくきく話だが統計上は飛行機に乗っている方が町を歩いているよりも安全であるなどという。飛行機に乗っている状態というのは比較的に単純な状態であってそれに条件をつけてみても知れたものである。たとえば離着陸の時と一定高度で飛んでいる時のちがいなどがある。また飛行機の性能とか、使用時間とか、操縦士の経験年数なども関係はあるだろう。ところが飛行機に乗らない場合というのは千差万別、とてもここに列挙し得るものではない。したがってこの両方の場合の危険度を比較するとなれば、乗っていない場合というのをよほど限定しない限り、比較そのものが全く意味をなさなくなるし、あまりにこまかく限定してしまったのではそれ自体乗っていない状態ということの一般性が希薄になってやはり意味がなくなる。つまり話全体があまり意味がないというわけだ。

1　飛行機の安全性の論議はそれ自体に無理があり、無意味である。

2　飛行機の旅と徒歩の旅との危険性を比較することは旅そのものの意味が変わってくるので無意味である。

3　飛行機と町中の歩行との危険度の比較は条件が違いすぎて無意味である。

4　統計上は飛行機の方が町中の歩行より安全であるという話は、実証されたわけではない。

5　飛行機に乗っている場合でもいろいろの条件で危険性は変化する。

〔No.　7〕次の文の主旨として最も適切なものはどれか。

好意あふれたにこやかな顔の相手から、ひどい味の料理のおかわりをすすめられたとき、並のおとなは、ちょっとした苦境におちいる。よその土地をおとずれている旅行者としてなら、どうもこういうご馳走には慣れていませんので、苦手ですとすなおに言えるけれど、現におなじ文化圏のなかに生きている人間どうしの訪問客としては、なかなかつらいことになる。

子どもなら、「ぼく、こんなまずいもの、もうたべたくない」と、平気で言えるのかもしれない。もちろん子どもにもよるだろうが、ともかくおとなは、ときどき子どもたちの率直さをうらやましがる。いかにも、率直は純真や正直にも似ていて、その上、意味の伝達という点で経済的でさえある。

昔から言語表現について、≪率直≫は一般に重要な美徳と見なされてきた。しかし、ためらいもなく「こんなまずいもの」と言える子どもの率直さは、じつはおこがましい自己中心主義の別名でもある。子どもは、自分の心のなかにある自己流の辞典一冊を、それこそ唯一の≪標準版≫だと固く信じていて、別の人の心のなかにはまた別の版の辞書がありうるとは、想像もしない。自分にとって「まずい」ものが別の人にとっては「おいしい」かもしれないなどとは思ってもみない。

言語表現において、率直と傲慢はほとんど見分けのつかない一卵性双生児である。

1　言語表現において、率直と傲慢とはじつに同じ質のものである。
2　言語表現について、率直は一般に重要な美徳と見なされてきた。
3　率直は純真や正直にも似ており、また意味の伝達において経済的である。
4　子どもの率直さは、おとなにとってうらやましいものである。
5　子どもの率直さは、じつは自己中心主義の別名である。

〔No.　8〕次の文の主旨として、最も妥当なものはどれか。

最近でこそあまり使用されなくなったが、旅芸人という言葉がある。旅を栖（すみか）に芸を売って生活している人たちをいう。芭蕉も、旅先で句会などを開催しており、おそらくいくらかの謝礼をうけているのではなかろうか。しかし、旅芸人と芭蕉との違いは、金もうけのために出かけたかどうかの、因果関係の相違といえよう。

それはともかく、かつては金もうけの手段としての土地移動にまで旅という言

葉を使用していたのだから、旅はけっして仕事でない旅行だけを表す言葉ではなかった。しかし現在はもっぱら、金を使ってする、自らの発意で出かける土地移動に使用されることが多い。

さてその内容となると、人によりかなり異なってくる。だから、自分が旅だと信じて行動するなら、人がどう思おうが、その人にとっては旅ともいえる。しかし、ただの土地移動なら、それは旅行であって、旅とはいえないと考えている人がかなりある。内面的に不可欠のものが存在してこそ旅と呼べる、とまでわかっていても、その指摘がなかなかむずかしい。

私たちの日常は、自由社会の世の中といわれる。自由経済の世の中といいなおしたほうがよいのかもしれない。金銭を媒介すれば、好きな所へどこまでも行けるし、好きなものを何でも手に入れられる自由がある。しかし、これがはたして其の旅の自由であろうか。やっと自由を獲得できると、喜びいさんで出かける旅で、はたしてどれだけ真の自由を獲得できるであろうか。わざわざ、ふだん以上に束縛された旅におし込められがちではなかろうか。

それは、旅のすべてを金銭で他人に委(ゆだ)ねているからである。旅の自由を取り戻すためには、他人の意見を参考にするのはかまわないが、自分の旅を他人に委ねないことである。自分が行動する旅の計画を、わざわざ旅行業者の手に委ねるのでなく、選択や準備も含めて自分ですることである。

1　自分が旅だと信じて行動すれば、ただの土地移動であっても旅といえる。
2　すべてを金銭で他人に委ねている旅は、真の旅ではなく旅行にすぎない。
3　旅の自由を獲得するためには、なるべく金銭をつかわないようにすることが必要である。
4　自由社会での旅は束縛されたものとなりがちであり、自由を取り戻さなければならない。
5　旅の自由を取り戻すためには、自分の旅を他人に委ねないことが必要である。

〔No.　9〕次の文の主旨として、最も妥当なものは次のうちどれか。

我々の持つ知識は凡そ現在のこの一瞬に至るまでの時間的過去から得られたものであって新しいもの、未知なるものに対する我々の直覚や判断は何らかの形で過去の類似の現象との関連において与えられている。自然科学上の命題にしても将来の予測にしてもすべて今日までの既知の材料を根拠として成立しているのである。とすれば判断とは歴史であり、知識とは歴史である、と言うこともできる。過去の事例について相対的に豊富で詳細な知識を持つ者は、例えば青年に対して老人が、学生に比べて教師がしばしばそうであるように生起する新しい現象に対して、その新奇性よりも連想された過去の類似物との共通点の方に着目しがちである。そして過去の事例を単なる書物的知識としてではなく自己の痛切な体験として内面化している人の場合、その発言は「教訓」「忠告」ないし「警告」として影響力を待つことになる。このような関係を大規模な場に移して、人類の歴史とは過去が現在に与える教訓の百科事典と見ることも可能であり、歴史は多くの場合そのような意味において書かれ学ばれたのであった。

1　新しいものに対する我々の判断は歴史における類以現象との関連で与えられており、歴史は現在に与える教訓とみることができる。

2　我々が歴史を学ぶ場合、過去の事例を単なる書物的知識として得るにすぎないため、痛切な自己体験を経た後に歴史を学ぶ必要がある。

3　新しいものや未知なるものに対する我々の判断は、既知の材料を根拠として行なうため、歴史の豊富な知識をもつ者が適切な判断をすることができる。

4　我々が歴史を学ぶ場合、過去の事例と現在とを結びつけて考えがちであるか、人類の発展を促すには歴史の書物的知識を冷静に受けとめる必要がある。

5　新しいものや未知なるものに対する我々の判断は歴史の知識に偏りがちであるから、人類の発展を促すにはその新奇性に着目することが不可欠である。

〔No.　10〕次の文の主旨として、最も妥当なものはどれか。

芸術家達のどんなに純粋な仕事でも、科学者が純粋な水と呼ぶ意味で純粋なものはない。彼等の仕事は常に種々の色彩、種々の陰翳を擁して豊富である。この豊富性の為に、私は彼等の作品から思う処を抽象することができる。という事は又、何を抽象しても何物かが残るという事だ。この豊富性の裡を彷徨して、私は、その作家の思想を完全に了解したと信ずる。その途端、不思議な角度から新しい思想の断片が私を見る。見られたが最後、断片はもはや断片ではない。忽ち拡大して今了解した私の思想を呑んでしまうという事が起る。この彷徨はあたか

も解析によって己の姿を捕えようとする彷徨に等しい。こうして私は私の解析の眩暈の末、傑作の豊富性の底を流れる作者の宿命の主張低音をきくのである。この時私の騒然たる夢はやみ、私の心が私の言葉を語り始める。この時私は批評の可能を悟るのである。

1　作家の作品を徹底的に解析していけば最後にはその作家の純粋な思想を完全に了解できる。

2　芸術家の作品には種々の色彩や陰翳が豊富なので、それを批評することは荒野を彷徨するに等しい。

3　作家の思想を常に新しい角度からみることか、傑作の批評には不可欠である。

4　作品に含まれるさまざまなものを十分に検討し、その背後にある作者の主張がみえはじめたときにはじめて批評が可能となる。

5　作者の宿命の主張は１つしかありえず、作品の見かけ上の豊富性にまどわされているうちは、その作品を批評することはできない。

〔No.　11〕次の文章の主旨として妥当なものはどれか。

無頓着な人と道を求める人との中間に、道というものの存在を客観的に認めていて、それに対して全く無頓着だというわけでもなく、さればといって自らすすんで道を求めるわけでもなく自分をば道に疎遠な人だとあきらめ、別に道に親密な人がいるように思ってそれを尊敬する人がいる。尊敬はどの種類の人々にもあるが、単に同じ対象を尊敬する場合を顧慮してみると、道を求める人なら遅れているものが進んでいるものを尊敬することになり、ここに言う中間人物なら自分のわからぬもの、会得できないものを尊敬することになる。そこに盲目の尊敬が生ずる。盲目の尊敬ではたまたまそれを指し向ける対象が正鵠を射ていてもなんにもならない。

1　道を求める人は尊敬の対象が正確で盲目の尊敬はしない。

2　道の存在を客観的に認めているのは道を求める人だけである。

3　中間人物が道に親密な人を尊敬するのは盲目の尊敬である。

4　盲目の尊敬は無頓着な人と中間人物に生ずる傾向がある。

5　無頓着な人は自分を道に疎遠な人とあきらめた人である。

〔No.　12〕次の文章の趣旨として最も適切なものはどれか。

「どうか神々よ、私が内面において美しい人間であるようにしてください。そして外面において私が所有するものは、この内面にあるものに和合するものでありますように。そして知恵ある者こそ富める者だと私が考えるようになりますように。また黄金の量は、思慮の健全な者でなければ運ぶことができないほどをさずけたまえ。」

ソクラテスの祈りとして知られている「ゆたかさ」とは何か。人はできるだけ多くの所有において「ゆたかさ」をみるかもしれない。しかし所有とは何か。自分のためにあるということではないのか。しかし私の所有とは何か。必ずしもものが私の「ため」になるとは限らない。私たちは自分の所有をもてあますこともある。自分の所有のために苦労し、時には不幸になることもある。だから多くの所有がすぐに「ゆたかさ」を約束するとは言えない。

1　思慮ある人こそ、富の所有を「ゆたかさ」に結びつけることができる。
2　「ゆたかさ」は、多くの富を所有してしまうと逆に失われていくものである。
3　多くの富があることと、内面の美しさとは、本来別の事柄であり両立しない。
4　知恵ある人は、過度の所有が人を不幸にすることを理解できない人である。
5　富を所有する人は、真の「ゆたかさ」や内面の美しさを見失ってはならない。

〔No.　13〕次の文章の要旨として最も適切なものはどれか。

さて、人間の欲望のうちで、もっとも基本的なものは物質的欲望であらうが、まづこれを観察しただけでも、ただちに、欲望が無限だといふ先入見が誤りであることが理解できる。（中　略）食欲についていへば、それは、最大量の食物を最短時間に消耗しようとするのではなく、むしろ逆に、より多く楽しむために、少量の食物を最大の時間をかけて消耗しようとする。さうするのは、人間がものの乏しさを知ってゐるからではなくて、食欲そのものの乏しさを知ってゐるからであって、その証拠に、あらゆる食事の贅沢はこの奇妙な吝嗇（りんしょく）から生まれてきた、と見ることができる。われわれは、一片の牛肉を楽しむために、たんにその調理に時間をかけるだけではなく、それを給仕人の手をわづらはせて食卓に飾らせ、おごそかな手つきで切りわけておもむろに口に遅ぶことを喜びとする。そのために、われわれは、さらに手数のかかる食器や食堂の調度を整へ、煩雑な作法と食卓の会話に気を配り、食前酒の選択から食後の音楽まで、ありとある演劇的儀式の創造に心を労することになる。その極限ともいふべき形態が、先にも触れた日本の「茶の湯」の儀式であって、これはただひとつまみの緑茶の粉を消耗するた

めに、おびただしい時間と儀礼と手仕事のわざを費やすのである。

1　人間の欲望のうちでも食欲には限界があるので、食欲を増進させるために食事に演出が必要である。

2　人間の欲望のひとつである食欲は演劇的儀式式を創造してきたが、その点で他の欲望と異なるものである。

3　食事のときの演劇的儀式は乏しい食物を補うという日本文化の習慣に基づいている。

4　人は食欲そのものの乏しさを知ることにより、食欲を満たしていく過程そのものを重要視することになった。

5　食事のときの作法や犠礼というものは、欲望は無限だという誤解から生まれたものであるが、実際は理にかなっている。

〔No. 14〕次の文の要旨として最も適切なものはどれか。

「ほんとうに個性的な経験には、それを表現する言葉はない」といいますが、これは味わうべきです。つまり言葉は元来社会的なものであり、その効用と限界とはそこにあるということです。わたしたちはよく日常生活でも「何ともいえぬほど悲しかった」とか「口にいえないほどうれしい」などといいますが、それは言葉の表現力の限界をおのずからよく示していると思われます。だから出来合いの言葉を無反省に使う精神は、ちょうどおしゃべりの人間に概して考え深い者はいないように、物事をほんとうにそれ自身に即して見、そして考える能力の希薄な精神といえます。ところが現代の新聞がこういう風に精神を既成概念の物置と化してしまう人びとを驚くべき勢いで大量生産していることは誰しも知るとおりです。新聞にあるとおりの意見を人に向かっていうことを、スタンダールは馬鹿者の１つの重大な兆候に数えていますが、今日ではこういう馬鹿にならなければほとんど生きる道が閉ざされているありさまです。それは現代の報道機関がたとえどんな善意と配慮とによって運営されたにせよ免れがたいことなのです。おそらくその根本の原因は機械文明の驚くべき進歩によって言葉がその普通性、抽象性のみを極度に拡大され、いわば物との間のつながりを切断されてしまった点にあるわけで、ある言葉が発せられた背景をなすイメージと受ける側が、それによって喚起されるイメージとが全く違うことは新聞の外国電報などでは常態であろうと思われます。

1　おしゃべりな人間は、言葉の意味合いの本質を理解して言葉を思う存分使いこなすことができる人であることは否定できない。

２　人はよく自分の表現力の不足を補うために「何ともいえぬほど悲しかった」「口にいえないほどうれしい」といって取り繕うものだ。

３　現代では、新聞にみられるように言葉と社会事象との本質的なつながりが失われがちである。

４　言葉による表現には限界があるといわれるが、機械文明の発達によってその限界を乗り越えることができる。

５　現代の報道機関は、読者に対して社会事象をどのように理解し、どのように言葉を使うべきかを教育する最高の働きをする。

〔No.　15〕次の文の主旨として適切なものはどれか。

ことわざ辞典というものをひもといてみると親子関係、夫婦関係、蓄財と成功の方法、飲酒の心得などあらゆるジャンルにわたって人生の指針が、ことわざというかたちで、じつに豊富に用いられていることにわれわれはおどろく。いやおどろくだけではない。旧来の習慣と一見切れているようにみえる近代人も、しばしば意識的にあるいは無意識的にことわざと自分の行為を照らし合わせてみたり、ことわざによって行いを正当化してみたりしている。たとえば現在の職場がイヤになって転職すべきか否か、といったような問題状況に立ったホワイト・カラー労働者が、たまたま「石の上にも三年」ということわざを思い出して、転職を思いとどまるというようなことは、大いにありうることだ。

１　ことわざには今では役に立たないものもあるので、内容の吟味が必要である。

２　現代には古いことわざだけでなく、近代人に適したことわざが必要である。

３　ことわざの主要な機能は、人の無意識に働きかけることである。

４　ことわざには、今でもわれわれの行動を何かのかたちで律する力がある。

５　ことわざは、主に慎重さを求められるときのガイドとして役に立っている。

〔No.　16〕次の文章の主旨として正しいものはどれか。

ヨーロッパにおいては温順にして秩序正しい自然はただ「征服さるべきもの」そこにおいて、法則の見いだされるものとして取り扱われた。特にヨーロッパ的なる詩人ゲーテがいかに熱烈な博物学的興味をもって自然に対したかはほとんど我々を驚倒せしめるほどである。人はその無限性への要求をただ神にのみかけて自然にはかけぬ。自然が最も重んぜらるる時でもたかだか神の作ったものとして、あるいは神もしくは理性がそこに現れたものとしてである。東洋においては自然はその非合理性のゆえに決して征服され能わざるもの、そこに無限の深みの

存するものとして取り扱われた。人はそこに慰めを求め救いを求める。特に東洋的なる詩人芭蕉は単に美的のみならず倫理的に、さらに宗教的に自然に対したがそこに知的興味は示さなかった。自然が人とともに生きることが彼の関心事であり、従って自然観照は宗教的な解脱をめざした。

1　ヨーロッパにおいては自然に対して美的のみならず宗教的関心を抱いたが、東洋においては自然の中に芸術を見いだし芸術を重んじた。

2　ヨーロッパにおいては自然は神とは別のもので知的関心の対象として考えられていたが、東洋においては自然はとらえ難いものとして考えられ、その中に宗教性まで見いだされた。

3　ヨーロッパにおいては自然は理性の発現したもので観照の対象であるが、東洋においては自然は芸術視され詩人の興味をひかなかった。

4　ヨーロッパにおいては自然はそれと人間との間に相互に働きかけるものと考えられ、東洋においては自然は一方的に働きかけてくるものと考えられている。

5　ヨーロッパにおいては自然はあまり優れた詩人を輩出しなかったが、東洋においては自然によって多くの優れた詩人が生まれた。

〔No.　17〕次の文の趣旨として適切なものはどれか。

「時間」というものは不思議なものである。誰にも平等に流れる。誰一人止めることはできない。ところが同じ時間が、長くなったり短くなったりする。待たされてジリジリしている時間は長く、楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう。平等に流れる時間はあくまで“物理的”であるし、あっという間に過ぎる時間は“人間的”である。車で人をはねたことのある人は、はねてから、その人が地上に落ちるまでを、まるでスローモーションビデオのように、ゆっくりと鮮明に視るという。これなどは、その人の“人間的時間”が、猛烈な早さで動いてしまうからである。人間的な時間とは、その人の意識状態、興奮や集中力などが関係するのであろう。一瞬一瞬に関心が集中し、そのことをよく記憶していると、時間は長く感じる。少年の頃の日は春の日のように長く、なかなか終わらなかったのに、年をとると一日も一月も、あっという間であるのはこのせいであろう。“人間的時間”は、意識を失えば止まってしまうのである。眠っていても同じである。

1　時間には、物理的なものと人間的なものがあり、人間的な時間は、その人の意識によって短くも長くも感じられるものである。

2　時間は人の意識とともにあるので、時間を意識していない少年の頃には、人間的時間はなく、物理的時間のみがある。

3　年をとるとあっという間に時間が過ぎてしまうのは、その人にとって人間的な時間が猛烈な速さで動くからである。

4　物理的な時間は誰にでも平等に流れ、誰一人止めることはできないが、意識を失えば止まってしまうものである。

5　楽しい時を過ごしていると、一瞬一隣に関心が集中するので、人間的時間も物理的時間もあっという間に過ぎるものである。

内 容 合 致 と 下 線 部 の 意 味

内容合致の問題とは、問題文中の一部を取り上げ、それと意味が合致しているものを選ばせるものです。文章中の語句を説明させる問題と下線部の意味を説明させる問題があります。

本書では、文章中の語句の内容を説明させる問題を「内容合致」、下線部の意味を説明させる問題を「下線部の意味」として分けています。

具体的解法のポイント

① まず問題の要旨を把握する。

⇒ 全体を把握することで、該当する部分が文章全体でどういう位置にあるかを知る。

② 下線部周辺の文の主張を把握する。

⇒ 前後の文を検討することで、主語、意味が明確になっていく。

③ 下線部の文における使用語句と対応関係にある語句を整理する。

④ 言葉は常に錯誤を含んでいる。最小の誤差の選択肢が正答に近い。

⇒ ある部分の言葉を飛躍させた語句を用いている場合、誤りの可能性大。

⇒ 使用語句に必要以上の意味を感じさせない選択肢が正しい。自然な文章を選ぶ。

⑤ 強調、偏重が鮮明になっているものは避ける。

⑥ 選択肢の文を文中の他の文を用いて置換してみる。

⇒ 同一の言葉は使っていないが、問題文中の一文を置換しているのが内容把握の選択肢である。

２　内　容　合　致

〔No.　１〕次の文章の筆者が考えている旅として、最も妥当なものはどれか。

旅は心の中でもできる。病床にふしている人でも、現実にそこを旅した人よりも旅情を味わっている場合がある。それは想像力が豊かだからだ。逆に小説の中に描かれた風景や土地にあこがれてそこへ行き、現実には失望したといって帰ってくるような人もいる。それは小説家がうそをついたのではない。現実が先行して実際を変えたのでもない。旅情というものは、意外に、その人の心の中にあるものだということである。ある土地の旅をして何が心に残ったか、胸に手をあててそれを思い返してみると分かる。旅先での、未知の人との出会い、その人のおしやべりやアクセントそして、その時自分が味わった何ともいえない感情、そうしたものが旅の忘れ得ぬことではなかった。そういうイメージは常に自分の心の側にある。心が風景をみるのである。

１　できるだけ多くの人と出会っておしゃべりをする旅
２　小説に描かれた風景や土地を訪れて現実を確認する旅
３　事前に充分な準備をして計画的に実行する旅
４　目の前の風景に心を奪われず空想や物思いにふける旅
５　風景や人との出会いで得る感動を大切にする旅

〔No.　２〕次の文章の「おれ」の気持ちとして最も妥当なものはどれか。

なぜこんな運命になったか判(わか)らぬと、先刻は言ったが、しかし、考えようによれば、思いあたることが全然ないでもない。人間であった時、おれは努めて人との交(まじ)わりを避(さ)けた。

人々はおれを倨傲(きょごう)だ、尊大だと言った。実は、それがほとんど羞恥心(しゅうちしん)に近いものであることを、人々は知らなかった。もちろんかつての郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病(おくびょう)な自尊心とでもいうべきものであった。おれは詩によって名を成そうと思いながら進んで師に就(つ)いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨(せっさたくま)に努めたりすることをしなかった。かといって、また、おれは俗物の間に伍することも潔(いさぎよ)しとしなかった。ともに、わが臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。

倨傲：おごりたかぶること　　郷党：同郷の仲間
鬼才：世に珍しい才能　　伍する：仲間に入る

1　自分の運命に雄々しく立ち向かう勇気
2　自分の才能に対する絶対的な自信
3　自分の小心さとおごりに対する反省
4　故郷を懐かしむ落胆の思い
5　自分を受け入れてくれない世間に対する怒り

〔No.　3〕次の文章の「私」の気持ちとして最も適切なものはどれか。

その日私は何時(いつ)になくその店で買物をした。といふのはその店には珍らしい檸檬(れもん)が出てゐたのだ。檸檬など極くありふれてゐる。が其の店といふのも見すぼらしくはないまでもただあたりまへの八百屋に過ぎなかつたので、それまであまり見かけたことはなかつた。一体私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたやうなあの単純な色も、それからあの丈の詰つた紡錘形の恰好も。――結局私はそれを一つだけ買ふことにした。それからの私は何処へどう歩いたのだらう。私は長い間街を歩いてゐた。

始終私の心を圧へつけてゐた不吉な塊がそれを握つた瞬間からいくらか弛(ゆる)んで来たと見えて、私は街の上で非常に幸福であつた。あんなに執拗(しつこ)かつた憂鬱が、そんなものの一顆(いつくわ)で紛らされる――或ひは不審なことが、逆説的な本当であつた。それにしても心といふ奴は何といふ不可思議な奴だらう。

その檸檬の冷たさはたとへやうもなくよかつた。その頃私は肺尖を悪くしてゐていつも身体に熱が出た。事実友達の誰彼に私の熱を見せびらかす為に手の握り合ひなどをして見るのだが、私の掌が誰のよりも熱かつた。その熱い故だつたのだらう、握つてゐる掌から身内に浸み透つてゆくやうなその冷たさは快いものだつた。

1　自分の悩みが何気なく手にした一つの檸檬によって軽くなるのが不思議だった。
2　檸檬一つで解消されるほど、自分の悩みは軽いものだった。
3　好きな檸檬を早く食べて、元気を取り戻したかった。
4　珍しく美しい檸檬を手に入れられたので、友達に見せびらかしたかった。
5　檸檬の外形の美しさや冷たさは好きだが、味のほうはそれほど好きではなかった。

〔No.　4〕次の文の内容と一致するものはどれか。

絵とは古風なものだ。布や板、あるいは壁画に線や色で何かを描くといった行為は有史以前からあった。おそらく人類はその誕生以来、絵を描き続けてきたといえるだろう。

紙に鉛筆やペン、クレヨンや水彩で描く、あるいはキャンバスに油やアクリル絵具で描くといったことだって、基本的には太古以来の描く行為とそれほど隔たりのあるものとは思えない。色材や支持体は歴史とともにかなり変化してきてはいる。けれどもドゥローイングをしていたり、キャンバスに筆で絵具を塗っていると、ああなんという古いしぐさで、自分は生きているのだろう、と思うことがある。実際、今私の用いているメディアはセザンヌの用いたものとほとんど同じであり、レンブラントのそれともあまり違わない。新しいメディアがどんどん開発されると、絵を描くという行為がいかにも古風に思えるのはいなめない。

絵は直接生活に役立たないし、情報社会といわれる現実の活動から取り残された時代錯誤的所産に思えるかもしれない。しかし、私は絵画といういかにも古風な人間の営みが、これからの社会で、その時代錯誤的性格故に、あるいはその何の役にも立たないという性格故に、逆に重要なインパクトを持つようになるかもしれないと思う。

1　絵が古風であるのは、情報社会から取り残されているからだ。
2　絵を描く行為が古風に思えるのは、新しいメディアがどんどん開発されるからだ。
3　時代錯誤的性格や、生活に役立たない性格が、絵を時代から取り残させた。
4　絵が直接生活に役立たないのは、時代の進歩についていけないからだ。
5　絵を描く行為を古いしぐさと感じたのは、表現の方法としての制約が強いからだ。

〔No.　5〕次の文の内容と一致するものはどれか。

京都に「花の寺」と異名をとる法然院というお寺がありますが、何百年か樹齢の椿があってみんな見に行きます。ところが、あるドイツ人といっしょに見に行ったとき、椿の花びらが庭一面に散っている。どうしてこんなにしてほうっておくんだ。手入れの行き届いたお寺で、どこを見てもひじょうにきれいだ。ところが、椿の花が散ったままにしてあるのはどういうことだ、と言われて、ぼくはなるほど、そんなことを感じる人もいるのかと思ってびっくりしたのです。

ドイツ人の考え方からすれば、散らばったものは全部片づけなければいけな

い。取り去る、清掃するということが文化であるというふうに彼らは考えている。私たちのばあいには、花びらや葉っぱというのは、散ればやがて腐って土に帰って、もういちど生命のもとになってよみがえって、新しい花を咲かすであろう、という、漠然とした自然の循環作用についての信頼感というものをもっている。ですから花は散ったままのほうがいい。あるいは葉っぱは散ったままのほうがいい。あまりにもきれいにスカッとしていると、何か不毛を感じさせるわけです。

1　ドイツ人の考え方からすれば、樹齢の古い椿の花はけっして美しいものとはいえない。

2　ドイツ人と日本人は宗教的伝統が異なるので、美に対する感覚が異なっている。

3　日本人はドイツ人とは異なり自然の循環作用を信頼するような文化をもっている。

4　ドイツ人はきれいずきだが、日本人はおおざっぱな性格で細かいところを気にしない。

5　ドイツ人は自然よりも人工物を好むが、日本人は逆に自然のほうを好む。

〔№　6〕次の文章で筆者が表現したこととして最も適切なものはどれか。

殻の中からはじめて出てくる蝉が、どれほどあやしい美しさをもっているかは実際に見た人でなくてはわかるまい。

消え入りそうな軟弱さ、ちょっと触れても霧散してしまうはかなさ――日の光の下では生まれえぬ、きわどいもろい美を彼らは所有していた。茶褐色のアブラゼミの羽も、生まれたばかりには純白であった。しっとりぬれた、魅するような純白であった。身体も白かった。なにか妖気じみて、おとぎの国の生き物に思われた。上半身が殻から抜けると、このういういしい生き物はあおむけにそりかえる。身体の重みで下半身を殻からはなし、静かに起きなおると、なよなよとした青白い全裸の姿で殻にしがみつく。その動作を幼いぼくは目をこらして見つめていた。せつないほどの緊張になにもかも忘れ、あたかも魂をぬかれたように…。

1　蝉が殻の中から出てくるあやしい美しさや緊張感に心を奪われた幼い日の思い出。

2　蝉の動作の不気味さとおそろしさに驚き、動けなくなった幼い日の思い出。

3　殻の中から出てくる蝉の詳しい説明をすることで表現される、虫の生命の大切さ。

４　子どもの頃虫を追いかけていただれにでもある懐かしい思い出の読者との共有。

５　この世のものとは思われない神秘性をもった虫の生態の不可思議さ。

〔No.　7〕次の文章で、筆者の考える「読書」として最も適切なものはどれか。

読書の賛美とか読書の効用といったことは教科書のように書かれている。読書ということが教養として考えられていたのは昔のことである。聖賢の書をひもとくことは最大の仕事として考えられた。また、灯火親しむべき時といったように秋の夜のうらがなしさも出ている。読書の趣味ということは大体教養ある慰めであるということを意味しているように私には思われる。

（中　略）

しかし、近代人になると娯楽としての読書が非常な生活的意味をもってきた。娯楽と趣味ということは違った領域をもっている。昔の読書を好む人は娯楽というよりも趣味としての部分が多いと思う。また、読書ということは、昔の人の頭では勉強とか教養といった意味も含まれている。私などは職業上読書することは普通日常の仕事であって、本を読むということは娯楽ということにはならない。むしろ本を読まないでいることが娯楽の境地になるというパラドックスが真理である。また、私にとっては本を読むことが釣りのような趣味といえない。

現在では、私と同じように多くの人たちには本を読むことが趣味というものにならない。たしかに読書は私にとっては勉強になる。けれども決して趣味でもなければ娯楽にもならない。

１　読書は趣味として教養ある慰めである。

２　読書は趣味や娯楽というより、教養としての意味を多く含んでいる。

３　読害は娯楽として大きな生活的意味をもっている。

４　読書は教養であり、仕事であると同時に趣味にも娯楽にもなりうる。

５　読書は普通日常の仕事であって勉強にはなるが、決して趣味にも娯楽にもならない。

〔No.　8〕次の文章で筆者が考える「親友」として最も適切なものはどれか。

私たちは兄弟のように親しくしている友人については、自分も相手と同じように成長していると思いがちである。いや、本当は、自分のほうが少し先に進んでいると思いたい欲求をもっている。相手がいつのまにか自分を引き離して遠いところに行っているなどとは、とても考える気にならない。だが実際はその反対の

場合が少なくないのである。それをこちらに気づかせないのは相手の友情である。以前は、何についても二人の見方や考え方が一致した。しかしそういう期間はごく短いのであって、二人が成長すればするほど、お互いのものの見方や考え方に距離が生じてくるのが当然である。そのとき二人が同じように成長しているのならば、たとえ相互の考え方が非常に違っても、それを理解しあうことができる。

悲劇は、一方がいつまでもおなじところで足ぶみをしているのに、相手はいつの間にか遠くを歩いている場合に生じる。永久に親友であるためには相互の友情に常に養分を与えなければならない。その養分とは、一日に言って、相互の励み合いである。競争といってもよい。親友は同時に好敵手でなくてはならない。

1　何についても、いつでも二人のものの見方や考え方が一致している。
2　相互の考え方が違っても、お互いに理解し合うことができる。
3　常に切磋琢磨しあうことができる、よき競争相手である。
4　お互いに、自分の成長を相手に気づかせない思いやりをもっている。
5　成長するにつれて、相互の考え方に距離が生じてくる。

〔No.　9〕次の文章から判断して、作者の考えとして最も適当なものはどれか。

他の芸術ならそうでないところでも、文学の所以ということになると、いまなお私には釈然としないところが残ってしまう。それは、文学が言葉を用いる芸術であるところから来ている問題である。音楽や絵画なら非具象という観念と容易になじむが、文学はそこがなかなかなじまない。芸術は、本来意味の説明やその伝達を本領としたものではなく直接内面に到達すべき営みである筈なのに、文学はどうしても意味の媒介という手続きを踏む。そこに芸術の純粋性を求める立場に居る者の感じるもどかしさがある。朔太郎は、初期の頃から終始詩を音楽に近づけようとして、遂にはそこに敗退してしまうのだが、そこでたたかわれたのは、文学のこの本質点での勝負であった筈である。その点で、私は朔太郎は正に＜近代＞ならぬ＜現代＞という文化の特質と対面していたのだと思う。しかし、彼はその現代を貫徹しえなかった。そこに彼の敗退感は根ざしているが、その原因として考えられるのは、彼の実生活が、おおむねその現代性を希釈するものとして作用したことであった。私はそのあたりのかねあいを作品に即してあとづけることにより、現代の文学がかかえている複雑な問題のある本質的な側面に触れられたらと願ったのであった。

1　朔太郎が詩を音楽に近づけようとしたのは、音楽は意味の媒介という手続を

踏まない点において純粋な芸術であるとしていたからである。

2　朔太郎は、詩は他の文学とは違って純粋な芸術であると信じ、それを証明するためにたたかっていた。

3　朔太郎が、詩を音楽に近づけようとして、遂にはそこに敗退してしまったのは、現代性を希釈させる実生活というその時代的制約からすれば無理からぬことであった。

4　朔太郎が感じている敗退感は、彼の実生活の影響からきているものであって、実際には、朔太郎は現代文学がかかえている複雑な問題を解決していたといえる。

5　朔太郎が詩を音楽に近づけようとした理由を明らかにすることは、現代文学がかかえている複雑な問題を解決することである。

〔No.　10〕次の文章における筆者の主張として最も適切なものはどれか。

今日では民主主義の影響を受けて、協力の美徳が服従の美徳の占めた位置にとってかわった。昔流儀の先生ならば、生徒の人柄を評して君は従順ではないと言うところで、現代の校長は子供についてあなたは非協力的だという。要するにこれは同じことである。どちらも生徒が先生に従わなかったわけだが、前者の場合、先生は為政者としてふるまい、後者は民衆、つまり生徒達の代表としてふるまう。この際に、新しい言葉を使おうが、古い言葉を使おうが、先生の意図は、生徒に素直さや暗示感応性や、群居本能や、因襲尊重の精神を教え込むことであり、その結果は、独創性や、進取の気性や、非凡な才能を抑えつけることになる。何か価値ある仕事を成し遂げた大人は、子供の頃協力的ではなかった。概して彼らは孤独を愛し、本をかかえて教室のすみに逃げ込み、野蛮な仲間の注目をのがれてほっとする生徒だった。芸術家、文筆家、科学者として名をあげた人達のはとんどは、子供の頃、仲間の嘲笑と軽蔑の的であり、先生の方でも生徒が風変りでは具合いが悪かったので、たいていは多数派に組することが多かった。

1　教育において生徒を現在のルールに従わせることは、必ずしも個人や社会の発展を促さない。

2　今日の教育は全体に対する協力が重視されているため、服従の美徳は軽視されている。

3　人間は多数者の認めることを行なう際は、少数の弱者の意見を考慮しなければならない。

4　民主主義的な教育は、社会に貢献する人間を生み出さない。

5　子供の行動を理解するためには、服従や協力を教えることだけでは不充分である。

〔No. 11〕次の文で作者が求めていることは何か。

自分の手でもよい、食卓にのった貝の殻でもよい、この世に自然に在るものを、目をこらし、てじっとみつめていると、それらがもつ形や色合いや質感の奇態さ、面白さに、今さらながら気づかされ、驚かされるものである。すべての物の形は、あたかも造物主の確かな意志が働いて．いるかのように、いわば合理的に構成されているものであり、色や模様の変化も意図的に仕組まれたかのように調和がとれ、律動感に富んでいる。硬軟軽重の度を異にするさまざまな質感の組み合わせも実に楽しい。しかし、ふつう私たちの目はなかなかそこまでに行きつくことがない。あわだたしい日常の暮らしの中で自然とのつきあいがついつい無感動なものとなり、「これは何」と概念的に識別するだけですましてしまうのが常である。

1　自然の脅威に対して畏怖の念をもつこと
2　自然の豊かな田園で暮らすこと
3　すべての自然が美しく保存されていくこと
4　自然に比していかに人間が卑小であるかに気づくこと
5　自然の中の美に感動する心をもつこと

〔No.　12〕次の文で筆者がいわんとしていることとして、最も適切なものはどれか。

昆虫分類学者が虫を見ている。素人目には全く同じように見える虫を、彼は２つのグループに分けてつぶやく。「何となくこれは違うぞ。ひとつ調べてみるか。」すぐれた分類学者は例外なく彼の直観に従って分類した事物から明示的な違いを引き出す術にたけている。すべての事物を調べまくって明示的な違いを明らかにした後、おもむろに分類する分類学者などはいない。彼の頭の中では最初から結論はほぼ決まっているのである。はじめから違いがある程度わからなければ、そもそも調べる元気が出るわけがない。無限の多様性のなかから、人はなぜ有限のパタンを選びだすことができるのだろうか。答えはカンタン。パタンは事物にではなく、人の意識の中にあらかじめ実在するからである。

１　人は意識の中にあらかじめ、いくつかの枠をもっており、それが分類するときの直観の源となっている。

２　人が無限の多様性のなかから有限のパターンを選び出すことができるのは、分類学の手法に負うている。

３　人は一見同一なもののなかからそれぞれの違いを発見することで、分類学という学問をもつことになった。

４　人は多様性に富んだ事物のなかから、１つのパターンを選ぶとき、全体を調べるようなことをしない。

５　正しい結論を得るのに直観に依存するという点において、学者は素人とは異なる。

〔No. 13〕次の文の著者の主張として最も適切なものはどれか。

今日では、小説や詩の作者と読者の間に、打てば響くような緊密な連帯感のあることはきわめてまれとなった。芸術が二十世紀において、生活の中心から「余白の部分」に追いやられてしまったということは創造者と享受者とのこのような分離と無関係ではない。しかも、享受者の側にとって、創造者がいよいよ遠い存在になるとすればなおさらである。それはもはや生活の「余白の部分」しか占めていないゆえに、いよいよ遠い存在になったと同時にますます「余白の部分」に追いやられるという結果をもたらす。「ながら族」というような言葉が端的に示すように、今日においては芸術を享受するということが、生活の本質とは関わりのない片手間の仕事となってしまったからこそ、われわれはこんなにも多くの芸術にとりまかれてしかも平気でいられるのであって、もしひとつひとつ本気でつき合っていたらとても生きてはいけまい。

1　現代では、芸術が満ちあふれているようにみえるが、われわれの芸術に対する関心は表面的である。

2　現代では、真剣に努力する芸術家の作品が、世間から正当に評価されない傾向がある。

3　現代では、人々に本気でつき合おうとする気を起こさせる芸術でなければ、歓迎されなくなった。

4　現代では、「ながら族」が本気でつき合おうとする芸術だけが、盛んになっている。

5　現代では、人々が芸術と本気でつき合おうとしないので、芸術家も創作意欲をなくしている。

〔No. 14〕次の文章の内容に合致するものはどれか。

認識の主体である主人公の精神のなかで、現実の姿は幾度も変化していく。これが十九世紀の自然主義的小説論と正反対であることは容易に理解されるだろう。自然主義の純粋客観主義の理論によれば、現実の姿はただひとつの不変のもので、作者はいわば「神の位置」を占めてすべての人物を見通している。しかしわたしたちが現実の世界に生きているのは、神としてではなく人間としてであって、したがってわたしたちは自分の主親によって現実を眺め、その主親は常に現実の一部しか捉えない。しかも、わたしたちの主親は経験によって変化していく。本格派推理小説の方法は、そのようなわたしたちの現実のなかで生きている生き方にそのまま適合していることで、二十世紀の新しい主観主義の文学に大き

な暗示を与えた。二十世紀小説のひとつの特徴は、現実というものが客観的にわたしたちの外部に唯一のものとして存在しているという仮説を捨ててしまったところにある。卑事というものは作中人物ひとりひとりのなかで別の姿を取っており、したがって現実は常にだれかの現実なのである。サルトルは「自由への道」の第一部のすべての場面を、必ずだれか作中人物のひとりの主親をとおして描いている。これはやはり多くの場面に分かれている、トルストイの「戦争と平和」と比べてみれば、作家の方法がまったく十九世紀のものとは異ってしまったところへいっていることがわかるだろう。

1　20世紀の小説は作中人物が認識したものだけが現実であるとしているが、19世紀の小説は現実を我々の外部にあって不変のものとしている。

2　20世紀の小説は現実をあるがままのものとして直視しているのに対し、19世紀の小説は現実から遊離した神の位置から人間を直視していたに過ぎない。

3　20世紀の小説は作者と主人公が一体化して離合しているが、19世紀の小説は作者と主人公との関係が不明瞭になっている。

4　20世紀の小説は人間を変化するものとしてとらえたが、19世紀の小説は人間を不変なものとしてとらえていた。

5　20世紀の小説は作中人物の精神だけを小説の対象としたが、19世紀の小説は主人公を取り巻く現実を小説の対象とした。

３　下　線　部　の　意　味

〔No.　１〕次の文中の下線部分の解釈として最も妥当なものはどれか。

気候の温暖化、砂漠化、森林破壊、酸性雨、野生生物の消滅など地球環境の悪化が人間の営為によってもたらされたことは、多くの専門家が指摘している。人間の影響力を飛躍的に高めた現代文明の責任は特に大きい。地球環境の問題は現代文明に対する問いかけでもあるのだ。

したがって、問題の解決にはその見直しが欠かせない。さまざまな便益を与えてくれる文明の見直しには当然、痛みが伴う。その痛みを覚悟することが出発点でなければならない。

1　環境破壊を乗り越えて文明を発展させようとする。
2　文明から便益を得たために環境が悪化したことを反省する。
3　環境破壊の責任を現代文明から恩恵を受けている人に帰す。
4　環境破壊が人間に与える苦痛を想像する。
5　文明の発達が環境破壊を招かざるをえないことを嘆く。

〔No.　２〕次の文中の下線部分の解釈として最も妥当なものはどれか。

人間とはお互い孤独な存在なのである。自己という＜われ＞は、われわれがお互いに孤独であるからこそ、あわてず、あきらめずに、一人ひとりが強くなって生きていかねばならない。われわれは、一人ひとりが自己のおかれた社会を正視し、また自己というものを冷静かつ公平に見つめて反省する眼をもたなくてはならないのである。ゆえに、本当の大人になるということは、決してたんに年齢のことではなく、社会的な意味における大人のことであり、このことは、じつは恐ろしいことでもあるのだ。幼な子が成長し、やがて親のリモコン圏内から独立し、友人の言葉にもふりまわされず、独立した大人になっていくということは、この孤独なる＜われ＞が限りない責任を一身にひきうけるということなのである。

1　お互いに責任を分担し合って独立をめざす大人
2　他人の言うことを無視しても自分自身を押し通そうとする大人
3　自分の孤独を自覚し、果たすべき責任をわきまえた大人
4　自分の弱点を認め、他人とともに恐怖に耐える大人
5　成人としての法的責任に目覚めた大人

〔No.　3〕次の文で、下線部の娘の態度は父にどのように感じられたか。最も適切なものはどれか。

ある夜遅くに、私が家に帰ってきたとき、娘が私に「どうしても話したいことがあるんだけど。」と言ってきた。しかし私は、「仕事で疲れているから、今度にしてもらえないかい。」と答えた。すると娘は、私の疲れを承知しながらもとても淋しそうな表情をした。私はその顔を忘れることができない。娘はその時に話したかったのである。だからこそ、私が深夜に帰ってくるのを寝ないで待っていたのだ。数日たって、私は娘に「このまえはどうしたんだ？」と尋ねると、娘は笑って「なんでもない。もういいのよ。」と答えた。この、もういいのよ、という言葉には、父に対する娘の批難がこめられているようであった。

1　仕事で忙しく家庭に存在していない父親の質問が煩わしかった。
2　父親を無視しようとした。
3　父親の助けを必要としないほど大人になった。
4　父親の忙しさは理解しつつも、淋しかったので父親と距離をとろうとした。
5　疲れている父親に質問するのはやめようとした。

〔No.　4〕次の文章の下線部のときの少年の気持ちを説明したものとして、最も適切なものはどれれか。

1時間とすこし乗って、少年はバスを降りた。ドアがしまると少年は吹雪の野にひとり取り残された。（中　略）頭を下げても下げても、吹雪はその顔をすくいあげるようにぶつかってくる。少年はついにうずくまった。くちびるが泣くかたちにゆがんだが、風に呼吸を奪われて声が出ない。二、三度あえぐようにしやくりあげて、少年は気が遠くなりかけた。そのとき、少年は、だれかの声を聞いたと思った。－－ 吹雪にあったら頭を下げるな。

それは、これからたずねていく祖父の声に似ていた。そうだ、いつか、たしかに、この声を聞いたことがある。柱の太い古い家の大きないろりのそばで、まだ幼かった少年を土のにおいのするひざに抱いて、祖父の聞かせてくれた話。そのとき、たしかに祖父は言った。――吹雪にあったら頭を下げるな。吹雪をにらんでいけ。頭を下げるな。

少年は立ちあがった。顔をあげた。その顔をまともに雪がたたいた。息がつまる。動悸がはげしい。ふたたびうつむきたい衝動をこらえて、少年は肩を張り、ぐっとあごをあげた。そのとき、吹雪は少年のひたいでふたつに裂けた。

1　最後の力をふりしぼって天をあおぎ、助けを求めようとする気持ち。
2　吹雪に負けないで、力強く立ち向かっていこうとする気持ち。
3　吹雪に負けて、もうどうなってもいいという気持ち。
4　最後に、吹雪の状態を冷静に見ておこうという気持ち。
5　激しい吹雪に対して腹立たしいという気持ち。

〔No.　5〕次の文章の下線部「それなりの意味」として、最も妥当なものはどれか。

政治は専門的知識に属するのか、それとも一般的知識に属することなのかということは、むかしからの論争問題なのである。しかし民主制は一応の仮定として、誰でも政策のよしあし、利害損失を判断することができるものとみるわけである。いわゆる陪審法廷において、一般市民が投票によって有罪無罪をきめるようになっているのも、同じ原理にたつものであって、一般市民の判断を信頼し、特に専門家に判決をまかせることはしないわけである。そしてこのような判断において過誤をおかすことのないよう、できるだけ判断の材料となる事実について「知る」ことを求めることになる。いわゆる「知る権利」らしきものが、そこに生成するということができるだろう。いわゆる「主権在民」の考えにもとづいて、「知る権利」を一般国民にあるとするのには、<u>それなりの意味</u>があると言わなければならない。

1　一般国民に判断の材料を与える
2　一般国民に政治の専門知識を伝える
3　一般国民に政治の専門家の過誤を訂正させる
4　一般国民に政治の専門家の判決を評価させる
5　一般国民に政治とは何かを教える

４　空　欄　補　充

空欄補充の問題は、与えられた問題文の中に空欄があり、ここに適当な語または文を補充することで、意味の通る文章にするものです。

具体的解法のポイント

① 選択肢のそれぞれの語や文の正確な意味をとらえ、それぞれの違いを明確にしておく。

② 選択肢に同質な意味の言葉が並列してある場合、ほかとの相違が明確な言葉に着目する。

③ 問題文の構造を把握し、要旨をとらえる。

④ 選択肢の語を入れてみてあきらかにふさわしくないものを消去して、それらしいものだけにする。

⑤ 実際に空欄に入れて文章の流れが自然で、意味内容が明確になるものを正答とする。

〔No.　１〕次の文中の空欄に共通に入る語として、最も妥当なものはどれか。

批評とは(　　)を吟味することだ。この場合、もっとも重要なことは(　　)することである。(　　)しなければ吟味する気力も湧いてきはしない。いや、そもそも吟味すべき対象さえ成立しないということになる。吟味すべきは作品そのものではなく、作品とそれを読んでいる自分との関係にほかならないからだ。関係が(　　)によって成立することはいうまでもない。吟味するとはこの関係、すなわち(　　)を疑うことである。

１　批判
２　学習
３　驚異
４　創作
５　感動

〔No.　2〕次の文中の空欄に共通に入る語として、最も妥当なものはどれか。

（　　）とは人生のある期間ではなく心の持ち方をいう。薔薇の面差し、紅の唇、しなやかな肢体ではなく、たくましい意志、豊かな想像力、燃える情熱をさす。（　　）とは人生の深い泉の清新さをいう。（　　）とは怯懦（きょうだ）を退ける勇気、安易を振り捨てる冒険心を意味する。ときには、20歳の青年よりも60歳の老人に（　　）がある。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。

（注）怯懦：臆病で意志の弱いこと。

1　成長期
2　成人
3　青春
4　健康
5　少年

〔No.　3〕次の文中の空欄に共通して入る語として最も妥当なものはどれか。

（　　）は、古い時代に作られ、今日まで多くの人に読まれ、受け継がれてきたもので、現代に生きる私達にとって貴重な文化遺産です。（　　）を読んでみると、今ではほとんど使われていない言葉や仮名使い、現代とは違う表現などに出会って、戸惑うことがあるかもしれません。しかし、それはとりもなおさず、昔はこんな言葉を使っていたのかという発見にもつながるはずです。そして、読み慣れるにつれて、（　　）の文章の美しさにも気付くようになるでしょう。

1　国語
2　古典
3　和歌
4　歴史
5　漢文

〔No.　4〕次の文中の空欄A、Bに入る語句の組合せとして最も妥当なものはどれか。

技術を見るとき、最新の技術・先端の技術やそのめざましい成長ぶりについ目が奪われがちなので、安定した技術は過去のものとして忘れられることが多いが、実は、技術にとって重要なのは(　A　)だけではないのであって、(　A　)で頭打ちになる以前から他の重要な面が成熟してくる。その一つは「(　B　)」である。新製品登場の頃には、競争が激しいから、価格と性能に開発のウエイトがかかる。低価格と高性能で競争が行なわれ、(　B　)は犠牲にされることが多いのである。とくに急速な成長期には、すぐ陳腐化するから、メーカーもユーザーもあまり(　B　)の高さを要求しないということになる。しかし、ほかならぬこの競争の過程で(　B　)の向上が行なわれ、同じ(　A　)なら(　B　)の高いものが生き残って行く。(　B　)の高いものは安全性も高くなるから、そういうものは生き残る。二十世紀後半に入ってからは、すでに見たように(　B　)の面での競争も激しくなった。しかしそれも大体、(　A　)がある程度確保されたうえでのことである。

	A	B
1	価格	収益性
2	性能	知名度
3	性能	信頼性
4	性能	収益性
5	価格	知名度

〔No.　5〕次の文中の空欄A、Bに入る語句の組合せとして最も妥当なものはどれか。

ル・アーヴルの港やパリ郊外のアルジャントウーユの町でモネたちが見出したのは、自然は太陽の光の作用によって、さまざまな輝きを示すということであった。従来の絵画観によれば、自然の中に存在するものは、すべてそれぞれ（　A　）を持っていた。つまり、緑の草はいつも緑であり、青い衣裳は飽くまでも青い衣裳であった。ただその青や緑が、時に応じて（　B　）を示すだけであった。（　B　）は、具体的には、白から黒にいたる各種の灰色によって表現されていた。したがって、明るい青、暗い青という明るさの違いはあっても、同じものはつねに同じ色調を持っていたのである。

ところが、モネたちは、太陽の光の下では、自然のなかのものは（　A　）を持っていないということを見出した。緑の草も、時には夕陽の照り返しを受けて赤く輝くこともあれば、青い衣裳の上にオレンジ色の陽の光がこぼれ落ち

ることもある。それは言うまでもなく「光」の作用であるが、モネたちは、その「光」の作用を、躊躇なく「色」の世界に置き換えた。

	A	B
1	固有の色	色調の変化
2	反射光	色調の変化
3	反射光	明暗の変化
4	固有の色	明暗の変化
5	反射光	彩度の変化

〔№　6〕次の文中の空欄Ａ～Ｇには「本」または「書籍」のいずれかが入る。「書籍」の入るところをすべてあげてある組合せはどれか。

書籍と本は違う。実質は同じであるが、イメージが違うのだ。「モリモリ食べてバリバリやせる!!　シェイプアップ健康法」なんて本はあまり（　Ａ　）という感じがしない。逆に「比較文明学序説」といったたぐいの本は（　Ｂ　）というよりも（　Ｃ　）という言葉のほうがぴったりくる。また書籍の広告と本の広告も違う。去年の正月広告でいうと「近頃の若いものですが、本は読んでいます」という甲文庫の広告は（　Ｄ　）の広告だが、「古典は現代への熱いメッセージ」という乙書店の広告は（　Ｅ　）の広告の匂いが強い。

この二派は、昔から存在していた。「真の良書は自己自らを宣伝し普及する」と、昭和２年に乙書店の広告は言った。いい本というのは本自身が宣伝するから、広告なんか要らないという意味である。だったらこの広告も要らないんじゃないかという人もいるだろうが、それは違う。この乙書店の広告は告知である。お知らせである。これに対し「見よ！東西名著の大衆化!!」と！を三つも使って昭和８年中文庫は叫んだ。言ってみればこれは（　Ｆ　）の（　Ｇ　）化であり、お知らせを入れて市場を作り出そうとする広告である。

1　Ａ、Ｂ、Ｄ、Ｆ
2　Ａ、Ｃ、Ｄ、Ｇ
3　Ａ、Ｃ、Ｅ、Ｆ
4　Ｂ、Ｄ、Ｆ
5　Ｃ、Ｅ、Ｇ

〔No.　7〕次の文中の空欄に入る語句として最も妥当なものはどれか。

親と子の関係はどうしたらいいだろうか。原則的には親は子供の内面についてはほっておくしかないのだ。理解しようとしたり、いわんや共感しようとしたり、一緒に悩もうとしたりしてもむだなのだと思う。子供との距離が、刻々ひらいていくことに堪えるしかないのだ。そして、その距離をリアルにとらえている親は子供にとって魅力的だと思う。そうした親は、子供を理解しようとしたり一緒に悩もうとしない。そういうことができないことの悲しさ、寂しさ、情けなさを胸におさめて、子供に対する。いわば　(　　)として対する。そしてその節度を保てるということが、子供への愛情になっている、というような親になりたいと、少なくとも私は思っている。だから文句をいうときも子供の気持ちをいろいろ推測して、親らしくいい方を工夫するというような操作をなるべくすまいと思う。感じたことや、考えたことや、怒りや口惜しさを、加工しないで子供にぶつけたいと思っている。子供が刻々自分の世界をつくって親から離れようとするのに負けないで、親の私も自分の世界を子供の前に提示して、その世界を守りたいと思う。

1　親切な他人
2　熱心な教師
3　子供に甘い親
4　冷酷な他人
5　子供を無視する親

〔No.　8〕次の文章の未尾の空欄に入る文として最も適切なものはどれか。

ことばが思考の着物ではなくて、思考の肉体であるとは、私たちが思い、考える場合に概念と論理だけによるのではなく、イメージと想像力にもよるのだ、ということである。思考ということを日常生活の場面に引きもどしてかえりみるならば、これはあたりまえのことと見なされよう。たとえば、久しく会っていない友人に手紙を出したが、さっぱり返事がこない。遠く離れていても電話がかけられないわけではないが、わざわざ電話をするのもおおげさだし、また返事をくれないのは相手になにかそれなりの事情があるのではないか、いいたくないことがあるのではないか、などと考えて電話をかける気にもなれず、宙ぶらりんの落ちつかない気持で返信がくるのを待ち、相手のことや家族のことについて、私たちはいろいろと推理し、想像する。

このまえ会ったときにはあんなに元気だったし、仕事も家族も順調にいって

いたようだから、ただ忙しくて返事をくれないのかも知れない。忙しさにとりまぎれているだけかも知れない。いや、それならいいのだが、もしかするとなにか自分のことを怒っているのではなかろうか。なにも恨まれることはないつもりだが、あの男はひがみっぽいところがあるし……、それともひょっとすると日本にいないのかな、等々といった具合にである。

このように、日常生活のなかでは、(　　)。

1　私たちは、主として概念と論理によって思考を働かせているのである
2　イメージと想像力が用いられる場合はきわめてまれと言わねばならない
3　思い考えるとは、ああでもないこうでもないと推理し、想像することである
4　私たちは常に相手の立場にたって物事を考えている
5　私たちは、ことばに頼らず物事を思考するのが常識である

〔No.　9〕次の文中の空欄A、Bに入る語句の組合せとして最も妥当なものはどれか。

われわれの納得の仕方はいろいろあります。相当こみ入った問題になると、ただ数学的に正しいから、あるいは事実がそうだというので、受け入れてしまうこともないではありません。しかしもっと基本的な問題に対しては、それでは具合が悪くて、明証といいますか全体のイメージがぱっと疑いようもなくはっきりしているところまでゆかないと納得できない、つまり（　A　）でよいとはいうものの、それでは尽くせない気持があるわけです。ほんとうに納得がゆくというのは、単につじつまがあっているのとは違って、全体のイメージが細部も含めて一瞬にして明らかになるという段階がどこかにあるのではないでしょうか。他人には言わないでも自分で納得するときには、確かにそれをしているわけです。このような段階を踏まずに先に進むのは危っかしく思われ、自分でも満足できないわけです。それは俗にカンといわれたり、直観、想像力、構想力といわれたりしているものと関連しています。そこにキチンとした論理的思考の背後に（　B　）による思考の根元的な役割を考える根拠があります。

	A	B
1	論理や実証	イメージ・シンボル
2	論理や実証	事実の観察
3	全体的イメージ	論理や実証
4	全体的イメージ	事実の観察
5	イメージ・シンボル	事実の実証

〔No.　10〕次の文中の空欄に入る語句として最も適切なものはどれか。

心を天気に例えていうと、どうも僕らには、すきま風もなく暴風雨もおこらない状態が「理想」としてあるんですね。そして、そういうことが可能だと思っている。でも暴風雨など、全部こみで天気が成立しているわけで。太陽が照っている時を良い天気といって(　　)と思い込んでいるのだけれど、日照りばかり続いたら「良い」とはいえないでしょう。でも、それほど僕らのイメージは固定している。心の天気も、人はみな雨の降らないことを願っているんでしょうね。どこかに良い天気ばかりを生きている人間がいると、みんな錯覚しているんじゃないかな。そして、その人に比べると自分は残念だと思っているわけだけど、そんな人はいないんですね。

１「良い天気」は意味がない
２「良い天気」はめったにない
３「良い天気」は錯覚にすぎない
４「良い天気」は多いほど良い
５「良い天気」は良い天気とは限らない

〔No.　11〕次の文中の空欄Ａ～Ｇには「肯定」または「否定」という語が入る。このうち、「肯定」の入る箇所の組合せとして正しいものはどれか。

自分の正しさを証明するためには相当の損もいとわない、ということが意地であるとすれば、意地は（　Ａ　）されるべき美徳である。

しかし、一般には、意地という言葉はそういう（　Ｂ　）的なかたちばかりで用いられるものではない。むしろ、つまらぬことで意地をはって…、というふうに（　Ｃ　）的に用いられることが多い。意地っ張りという言葉には、根性のある奴だ、という（　Ｄ　）的な評価と、つまらぬことにこだわるひねくれものだ、という（　Ｅ　）的な評価とが同居している。意地という言葉は、場合によって二通りに使い分けられ、しばしば二つの相反する評価を同時に含んで用いられる。すなわち、近藤勇とか森の石松といったような大衆文化のヒーローは（　Ｆ　）的人物と認められたままで愛される人物であり、これが要するに意地っ張りなのである。意地という言葉が（　Ｇ　）的に用いられるのは、それが必ずしもよく考え抜かれたすきのない正義の証明のためにのみ用いられるのではなく、本人にも反省すべき点が相当あるにもかかわらず、それを反省しようとせず、僅かな理をたてにとって自分の正しさを強引に主張しようとする場合が多いからである。

1　A、B、C
2　A、B、D
3　B、D、F
4　B、D、G
5　C、F、G

〔No. 12〕次の文中の空欄A～Cに入る語句の組合せとして、最も適切なものはどれか。

昔の道に歩くために設備があったのは、生活が歩行中心だったからである。車社会は、道を車だけのものにした。そしていま再び人々は（　A　）を求めはじめた。

都市は、ビジネスや勉学のために地方から人の集まってくるところで道は通じてさえいればよかったのである。だが「産業道路」に対して「買物道路」も求められはじめた。しかし、かといって道路が（　B　）にこびてはならない。

たしかに道路は歩く魅力にあふれていなければならないが、そのために厚化粧してはならない。（　C　）、歩くことを挑発したりしてはならないのである。

	A	B	C
1	休息	走ること	また
2	歩く道	歩くこと	つまり
3	走ること	車	つまり
4	歩くこと	走ること	だから
5	自然	歩くこと	だから

〔No. 13〕次の文中の空欄A～Cに入る語の組合せとして、最も適切なものはどれか。

豆腐は偉い。形が残ろうと、つぶされようと、変幻自在に豆腐としての存在を主張している。（　A　）、過度な自己主張はなくて、どんな味にも染まるが、決して自分の味を失うことはない。甘かったり、しょっぱかったりする味付けに従うとみせながら、その実（　B　）自己主張している。

色にしても同じことだ。豆腐は白いので、どんな色にも染まるのだが、もともと白いのだという観念を絶対に捨てない。形にしろ、どんな容器に入っても固まる。冷たくしても、熱くしても何の変化もない。料理の相手も選ばない。野菜でも魚でも肉でもきちんと相手をしてみせ、自分はわきに控えながらも、本来備わった品位を毅然と保っている。どんなことをしても、豆腐は（　C　）を失うことはない。

ほんとうに豆腐は偉いものだ。私は豆腐が好きなのである。

	A	B	C
1	さらに	素直に	形
2	ところで	おおらかに	存在
3	または	がむしやらに	色
4	しかも	したたかに	自己
5	けれども	ひかえめに	品位

〔№. 14〕次の空欄A、B、Cに入る語の組合せとして、最も適当なものはどれか。

自己の否定は人生の肯定を意味する。自己の肯定はおうおうにして人生の否定を意味する。何らかの意味において自己の（　A　）を意味せざる人生の肯定はあり得ない。私の見るところでは、古今東西のすぐれた哲学と宗教とは、すべてことごとく自己の否定によって、人生を（　B　）することを教えている。

ひとむきの否定は死滅である。ひとむきの肯定は夢遊である。自己の（　C　）によって本質的価値を強調することを知る者にとっては、否定も肯定である。肯定も否定である。

	A	B	C
1	肯定	否定	肯定
2	否定	肯定	肯定
3	否定	肯定	否定
4	否定	否定	肯定
5	肯定	否定	否定

〔No.　15〕次の空欄Ａ～Ｆには「批評」と「評判」のどちらかが入るが、最も適当な組合せを示しているものはどれか。

噂は（　Ａ　）として１つの（　Ｂ　）であるというが、その（　Ｃ　）には如何なる基準もなく、もしくは無数の偶然的な基準があり、従って本来なんら（　Ｄ　）でなく、極めて不安定で不確定である。しかもこの不安定で不確定なものが、我々の社会に存在する１つの最も重要な形式なのである。

（　Ｅ　）を（　Ｆ　）の如く受取り、これと真面目（まじめ）に対質しようとすることは、無駄である。いったい誰を相手にしようというのか。相手は何処にもいない、もしくは到（いた）る処にいる。しかも我々はこの対質することができないものと絶えず対質させられているのである。

	Ａ	Ｂ	Ｃ	Ｄ	Ｅ	Ｆ
１	評判	批評	評判	批評	評判	批評
２	評判	批評	批評	批評	評判	批評
３	批評	評判	評判	批評	批評	評判
４	批評	評判	批評	評判	批評	評判
５	批評	評判	評判	評判	批評	評判

〔No.　16〕次の文中のＡ～Ｇには、「諷刺」または「ユーモア」があてはまるが、そのあてはめ方として適当なものはどれか。

（　Ａ　）は、毒のないものであり、（　Ｂ　）は毒のあるものであります。ですから（　Ｃ　）は人を怒らせることがありません。（　Ｄ　）は、ものを偏見のない目で、そうしてなんら感情なしに眺めなおしたときに生ずるグロテスクな効果をねらったもので、本来（　Ｅ　）は一定の政治目的や党派の目的のために、ことさら目的意識をもって行使されるべきものではありません。（　Ｆ　）とは、我々が現象だけにとらわれ従来通りの目だけで見ているもののヴェールをはがして本質を露呈させる批評の一形式であります。それも緊張に際して行動の自由をうばわれる人間の窮屈な神経をときほぐし、生活上の行動に対して自由な楽な気分にして励ますものであります。ですからイギリス人は激しい戦闘の中でも（　Ｇ　）の精神を発揮します。

１　Ｂは「ユーモア」である
２　Ｄは「諷刺」である
３　Ｅは「ユーモア」である
４　Ｆは「諷刺」である

5　Gは「諷刺」である

〔No.　17〕次の文のA～Cに入る語の組合せとして、最も適当なものはどれか。

（　A　）は結果として初めて享けることのできるもので、偶然によって与えられるものではない。偶然によって与えられる（　A　）もないわけではない。しかしそれは（　B　）であって、真の（　A　）とは区別せられている。偶然によって与えられた（　B　）の如何に頼りにならぬものであるかも、多くの人の語るところである。これを逆に言えば、偶然によって与えられた（　C　）も真の（　C　）とはならぬこと、その偶然がやがてまた（　B　）をもたらす偶然にならぬとも限らぬことである。禍福はあざなえる縄のようなものだという古い言葉があるが、これは本来（　A　）の問題ではなく（　B　）の問題なのである。

	A	B	C
1	運命	幸福	幸運
2	幸福	不幸	幸運
3	幸運	幸福	運命
4	幸福	幸運	不幸
5	幸運	運命	不幸

５　文　書　整　序

文書整序とは、いくつかに細分化された文を意味の通る文章となるように並べ替えるものです。具体的解法のポイント

① 単独で成立する文（独立文）をピックアップする。

② 補助的な性質の文を吟味し、独立文に接続させる。

③ 対立する意味の文が存在する場合は、結論の方に注目する。

④ 同質の文が存在する場合は、深度、補足度の強い方をあとにする。

⑤ 選択肢を見て、明らかな間違いの合体を探して排除する。

〔No.　１〕次の文の後に短文Ａ～Ｅを並べ換えて、意味の一貫する文章にするとき、最も妥当なものはどれか。

法隆寺の五重の塔は、高さが三十二メートル余、総重量は千二百トンもあります。いかに、いかるがの里の地盤がしっかりしているとはいえ、あれだけの重い塔が千二百年も狂いを起こさなかったというのは、驚くべきことといわなければなりません。

Ａ　ところが柱を一本一本測ってみると、どれもすこしずつ寸法が違っています。

Ｂ　こういう部材を集めて全体を一つにまとめあげることは、至難の業であったでしょう。

Ｃ　ところで千三百年の星霜に耐えた建物というと、細部に至るまで、極めて正確に加工された部分が精密に組み合わされていると思うでしょう。

Ｄ　それぞれにくせのある木を割って、それを削ったのですから割りすぎ削りすぎがあるのは当然です。

Ｅ　それを見事にやってのけ、統一された美しさと力強さ、さらに柔らかさまでかもし出しているのには、ただ敬服のほかありません。

１　Ａ－Ｄ－Ｃ－Ｂ－Ｅ

２　Ａ－Ｅ－Ｃ－Ｂ－Ｄ

３　Ｃ－Ａ－Ｄ－Ｂ－Ｅ

４　Ｃ－Ｅ－Ａ－Ｄ－Ｂ

５　Ｅ－Ｄ－Ｃ－Ａ－Ｂ

〔No.　２〕次のＡ～Ｅを並べ換えて意味の通る文章にするとき、最も妥当な並べ方はどれか。

Ａ　少なくとも私など、どれもこれもおもしろいものだと初めから思ったわけではありませんでした。

Ｂ　芭蕉の句などというのは、初めて読んでおもしろいものというのは、

Ｃ　その絵の姿がよく見えて、そういう点でのおもしろさというのがすぐにわかります。

Ｄ　むしろ蕪村の句などのほうがまだ、いわば句の中で絵を描いているようなところがありますから、

Ｅ　そうたくさんないのがふつうではないかと思います。

１　Ｂ－Ｃ－Ａ－Ｄ－Ｅ

２　Ｂ－Ｅ－Ａ－Ｄ－Ｃ

３　Ｂ－Ａ－Ｄ－Ｅ－Ｃ

４　Ｂ－Ｄ－Ｃ－Ｅ－Ａ

５　Ｂ－Ｅ－Ｃ－Ｄ－Ａ

〔No.　３〕次のＡ～Ｆを並べ換えて、意味の一貫する文章にするとき、Ａは何番めにくるか。

Ａ　物を一面からしか見ないということは、発見の驚きや喜びを失わせ、

Ｂ　私たちは、一目見たときの印象にしばられ、

Ｃ　これは、ずいぶんもったいないことをしていることになる。

Ｄ　結局、自由な発想を制限してしまうからである。

Ｅ　物の一面のみをとらえて、その物のすべてを知ったように思いがちである。

Ｆ　だが、ちょっと立ち止まって考えてみると、

１　１番め

２　２番め

３　３番め

４　４番め

５　５番め

〔No.　４〕次の短文Ａ～Ｅを並べ換えて意味の一貫する文章にするとき、最も妥当なものはどれか。

Ａ　夢についてはフロイトの「夢判断」をはじめとして多くの研究があり、

科学的な解明がいろいろと試みられている。

B　しかし、いくら分析しても夢の持つ神秘は容易には開示されはしないだろう。

C　ぼくたちは夢と現実という二つの世界に住んでいるのだ。

D　夢とは何か、などと言い出したらたいへんなことになる。

E　しかし、人間は夜ごとに夢を見る。

1　A－B－C－D－E

2　A－D－B－E－C

3　C－E－D－A－B

4　D－A－B－E－C

5　D－C－E－B－A

〔№　5〕次の文のあとに短文A～Fを並べ換えて意味の一貫する文章にするとき、最も妥当なものはどれか。

毎日いっしょに暮らしている家族の場合でも、また同じ学校、職場に通う者同士でも、一夜明けた朝の出会いのときにあいさつが必要なところからみると、

A　確かにだれかといっしょにいるときはその人の気持ちの変化についていきやすいし、

B　気持ちのズレや考え方の食い違いが生じてしまう可能性があるわけだ。

C　社会生活を営む人間にとって、別れて時を過ごすということは、私たちが意識している以上に言い知れぬ不安の原因となるものらしい。

D　だからこそ両者の関係が別れる前と同じで変わっていないことを確認したいのである。

E　ところがいったん離れてしまうと、その間に二人は別々の経験をするわけだから、

F　同じ情況の下で経験を積んでいるわけだから自分と相手との心的距離についても見当がつく。

1　A－D－E－B－F－C

2　A－F－E－D－C－B

3　B－E－D－A－F－C

4　C－A－F－E－B－D

5　C－D－E－F－A－B

〔No.　6〕次のＡ～Ｅを並べ替えて意味のとおる文章にするとき、最も妥当な並べ方はどれか。

Ａ　人間全体が、ささやかなことばの一つ一つに反映してしまうからである。

Ｂ　美しいことばとか正しいことばとかいわれるが、

Ｃ　それを発している人間全体の世界をいや応なしに背負ってしまうところにあるからである。

Ｄ　単独に取り出して美しいことばとか正しいことばとかいうものはどこにもありはしない。

Ｅ　それは、ことばというものの本質が、日先だけのもの、語彙だけのものではなくて、

1　Ｂ－Ａ－Ｅ－Ｄ－Ｃ

2　Ｂ－Ｄ－Ｅ－Ｃ－Ａ

3　Ｄ－Ａ－Ｅ－Ｂ－Ｃ

4　Ｄ－Ｂ－Ｃ－Ｅ－Ａ

5　Ｄ－Ｅ－Ａ－Ｂ－Ｃ

〔No.　7〕次のＡ～Ｆを並べ替えて意味の通った文章にするとき、その並べ方として最も適切なものはどれか。

Ａ　それは、「虚像」とつき合うことによってテレビの中における虚構時間の迫力に現実の時間が腐食され合わせて現実感を失っていくからである。

Ｂ　私たちの日常感じている時間のあいまいさをより生々しいものにする。

Ｃ　時間が生々しいものになったとき人間の身体は生き生きとし喜ぶ。

Ｄ　しかし、奇妙なことに、マラソン番組は逆に日常の時間に普通以上のリアリティを与える。

Ｅ　私たちはテレビ画面を長々と見ることによって時間を失っていくのが普通である。

Ｆ　マラソンはその喜びを与える。

1　Ｂ－Ａ－Ｃ－Ｅ－Ｄ－Ｆ

2　Ｃ－Ｂ－Ｅ－Ｆ－Ｄ－Ａ

3　Ｃ－Ｄ－Ｅ－Ｆ－Ｂ－Ａ

4　Ｅ－Ａ－Ｄ－Ｂ－Ｃ－Ｆ

5　Ｅ－Ｄ－Ｆ－Ａ－Ｃ－Ｂ

〔No.　８〕次の文のあとに続くＡ～Ｄを並べ替えて意味のとおる文章にするとき、最も適切な並べ方はどれか。

宇宙の歴史は百五十億年くらいだと推定されている。

Ａ　広大な宇宙の中には、太陽系よりもはるかに昔に誕生し、人類よりももっと進んだ文明を持つ知的生物がいるにちがいない。

Ｂ　その膨大な時間を考えれば、人類に文明が誕生してからの一万年は、ほんとうにわずかな時間である。

Ｃ　ともかく、宇宙は時間も空間も巨大であり、人間の常識的な概念や感覚では推し量ることはできない。

Ｄ　そうした知的生物は、同じような文明の発達した他の天体と星間通信をしているかもしれない。

１　Ａ－Ｄ－Ｂ－Ｃ

２　Ｂ－Ｃ－Ｄ－Ａ

３　Ｂ－Ｃ－Ａ－Ｄ

４　Ｃ－Ｂ－Ａ－Ｄ

５　Ｄ－Ａ－Ｃ－Ｂ

〔No.　９〕次のＡ～Ｈは「情報化革命」というテーマで行なわれた対談を並べ換えたものである。この２人は交互に発言しているが、１番めの発言はＡで、８番めはＢである。もとの発言どおりに並べ換えたとき、その順番として正しいものはとれか。

Ａ　企業の情報化についてよくいわれることですが、社内全体の情報化の設計かないとダメなんですね。

Ｂ　企業のそれよりは大分遅れるでしょうね。人によっては、キャプテン・システムを導入するでしょうし、新築のアパートなどに防災システムが完備されたりする。エリアによってはＣＡＴＶが入ってくるなどの浸透はある。

Ｃ　その点、日本の企業の情報化への意欲というか戦略はありますか。

Ｄ　問題は、経営者の理念ではないですか。他社のマネではなく自分の寸法、身丈にあったＣ＆Ｃの人工僕を作らなくてはいけない。

Ｅ　日本人の民族性もありますか。

Ｆ　ありますよ。企業のバイタリティーというものが、ロボットやＮＣをとり入れＦＡ化をすすめているし、またＯＡ関係機器の伸びは、年率20％の

高度成長になっている。

G　一方、家での情報化については、相手先の問題という気もしますが。

H　新しもの屋というか主体性のないところが、今はかえってうまくいっている。あっちがやればこっちもやるということで「みんなで渡れば、こわくない」というわけでしょう。

1　Cは２番め

2　Dは３番め

3　Eは４番め

4　Gは５番め

5　Hは６番め

〔No.　10〕次のA～Gを並べ換えて意味の通る文にするには、どの組合せが最適か。

A　外国のことばをそのままでは理解できないときに、自分のことばに置きかえるのが代表的な翻訳である。

B　しかし実質的な翻訳がこれに限るものでないことも、また明らかである。

C　よくわからないもの、自分からは離れているものを、わかったと感じさせるのは想像力のはたらきである。

D　想像力によってまだ見たことのないもの、あるいは、まだ名前のついていないものに名前をつけるのが比喩である。

E　普通、翻訳といえば外国語の自国語訳だけのことを意味し、それ以外のことは考えない。

F　ほんとうのところがよくわからない他人の心事を、自分の立場から推測して理解するのも、一種のりっぱな翻訳である。ただそれと意識していないだけのことである。

G　こう考えると、翻訳もごく広く解釈すると比喩の一種といってよいことがわかるであろう。

1　A－B－E－C－D－F－G

2　A－B－E－F－C－D－G

3　A－E－B－F－C－D－G

4　A－E－F－D－B－C－G

5　A－F－E－B－C－D－G